

# I 目次・章構成

はじめに (1)

第1章 本論の目的と課題 (3)

第1節 研究史と問題の所在 (3)

第2節 研究の対象 (5)

第3節 目的と方法 (10)

第2章 鎮墓神 (12)

第1節 研究の現状と問題点 (12)

第2節 型式分類 (19)

第3節 編年と分布 (23)

第3章 鎮墓獣 (28)

第1節 研究の現状と問題点 (28)

第2節 型式分類 (30)

第3節 編年と分布 (34)

第4章 鎮墓俑—「人獣型」— (43)

第1節 鎮墓俑研究の現状と問題点 (43)

第2節 型式分類 (50)

第3節 編年と分布 (52)

第5章 鎮墓俑—「人型」— (59)

第1節 分類基準と用語 (59)

第2節 型式分類 (62)

第3節 編年と分布 (66)

第6章 鎮墓像変遷の画期と分布圏 (75)

第1節 変遷の画期 (75)

第2節 分布圏と系統 (78)

第3節 鎮墓像と王朝の交替 (81)

おわりに (84)

## II 全体の要旨

死者を埋葬した墓室の入口に魔除けの鎮墓像を副葬する習俗は、春秋戦国時代にはじまり、漢・三国・魏晋南北朝を経て、隋唐に至る長期間にわたって、中国南北に及ぶ広域に拡散し、流行した。その生成・発展・終焉は、王朝の交替、民族移動、対外交流などと密接な関係があったと考えられる。鎮墓像の消長は、まさに中国文化史の縮図といっても過言ではない。

鎮墓像は発見以来、美術史学・文献史学において、鎮墓像の用途・機能の解読に力が注がれてきた。しかし、文献史料が皆無に等しく、史料からのアプローチには限界があった。また、考古学界においても、鎮墓像を年代決定の参考資料としては重視してきたものの、主対象として検討したものは少なく、個別事例の検討に留まっている。資料集成も不十分で、体系的な編年が構築されていないのが現状である。それゆえ、本論では鎮墓像資料を悉皆的に集成し、考古学的手法を用いて鎮墓像の編年を構築することを第一目標とした。これによって、墓葬の年代決定の重要な基準資料を得ることが可能になり、ひいては中国古代墓葬の変遷とその意義の探究にまで研究の射程が広がる。

この視点から、本論ではまず鎮墓像資料の全体を考慮しながら分類・再定義した。差が顕著である体軀姿勢を中心に、その他の諸特徴を加味して、中国古代鎮墓像を「鎮墓神」、「鎮墓獸」、「鎮墓俑」の3つに大別した。そして鎮墓神は2類（Ⅰ類「方柱状の身部」・Ⅱ類「円柱状の身部」）、鎮墓獸は3類（Ⅰ類「四足歩行型」・Ⅱ類「蹲踞型」・Ⅲ類「伏臥型」）、鎮墓俑は3類（Ⅰ類「人獸型」・Ⅱ類「人型」・Ⅲ類「神將型」）にそれぞれ細分し、計3大別8類とした。

次に、各類の鎮墓像を地域差や時期差を考慮に入れて、編年を完成させた。その上で、個々に組み上げた編年を総合し、中国古代鎮墓像の変遷過程と画期、さらに分布の傾向を見出した。

その結果、鎮墓像の変遷を、「獸」と「人」の要素の消長を基準に3時期に区分して認識することができた。分布域は南方地区、北方地区と境界地区の大きく3つの地区に分けられる。各地区は、楚文化圏（Ⅰ区）、漢文化圏（Ⅱ区）、胡漢一体文化圏（Ⅲ区）に対応する。分布圏内の鎮墓像を「楚系」・「漢系」・「胡漢系」鎮墓像として、変遷と分布を対応させて検討した結果、各系統の鎮墓像の出現・消長が、王朝の交替、民族の移動、対外交流と密接に結びついていたことが明らかになった。

## III 各章節の要約

**第1章**では、研究史と用語を整理し、研究方法と目的を示した。鎮墓像の研究史は、第1段階（1930～40年代）、第2段階（1950～90年代）、第3段階（2000年代～現在）に区分できる。第1段階は水野清一による「鎮墓獸」命名、伝長沙出土の楚の鎮墓獸の紹介と初歩的検討にとどまるが、第2段階で漢～隋唐の様々な鎮墓獸が発掘され、第3段階

にいたって美術史学・文献史学・考古学による本格的な研究が増加した。ただし、これらの研究は、分類と用語が鎮墓像全体を見通した体系的なものではなく、編年も特定の時期や地域を対象としたものに限られ、各種の鎮墓像の出現や終焉についての系統的な説明が不明であり、それらが課題として残っている。戦国時代楚の鎮墓像が「祖重」すなわち先祖の魂の憑代を意味する言葉で呼ばれていたという説には疑問があり、人獣区別しがたい神像として「鎮墓神」と呼び、それ以外は、獣形のを「鎮墓獣」、人形のを「鎮墓俑」と呼び分ける必要がある。そのうえで、紀年墓を基準としつつ、非紀年墓出土の資料をも型式学的に検討することで、体系的な編年を行った。

**第2章**では、戦国時代楚の鎮墓像、すなわち鎮墓神の編年を行った。この鎮墓神の用途については、鎮墓神説以外に、「祖重」（先祖の魂の憑代）説、山神説、竜神説、土伯（土中の怪物）説など様々な説がある。しかし、鎮墓神の祖型となる木製品に、墓を守るために副葬されることのある鹿角が結合し、鎮墓の性格を有する鎮墓神が誕生したと考える。鎮墓神は方柱形の身と偏平な顔を有するⅠ類と円柱・方柱形の身と突出した顔を有するⅡ類に大別され、紀元前5世紀中ごろに湖北省にⅠ類が成立・展開した後、紀元前4世紀初めに湖南省・河南省にⅠ類が広がるとともにⅡ類が出現するが、紀元前4世紀中ごろには衰退し始め、紀元前3世紀後半にはとどめる。秦の成立により楚の鎮墓習俗は抑圧されたが、前漢以降の「人獣型」鎮墓俑に影響を与えたと考える。

**第3章**では、漢代から南北朝時代にかけての鎮墓獣の編年を行う。鎮墓獣全体を「四足歩行型」と「蹲踞型」「伏臥型」に分け、全体の編年を行った。従来は北朝以降の紀年墓から出土する「蹲踞型」に研究が集中しており、「四足歩行型」は紀年墓から出土することが少ないため、編年が行われてこなかった。「四足歩行型」は尾の形態や姿勢などから型式分類可能で、古い一角獣の形態が前漢晩期に甘肅省に、やや遅れて陝西省に出現する。後漢後期に小型化したものが河南省南部・湖北省北部に出現する。この小型化したものは三国時代以降、長江中・下流域に広がる。一方、中原地域にも三国時代まで漢代の形態をとどめたものが残るが、北朝以降は「蹲踞型」およびこの系譜にある「伏臥型」に代わる。南北朝期には、北朝では「蹲踞型」「伏臥型」、南朝では「四足歩行型」が分布する。

**第4・5章**では、漢代から南北朝時代にかけての鎮墓俑の編年を行う。鎮墓俑は特に、人間もしくはこれに類する形態の鎮墓像として定義している。鎮墓俑は鎮墓像としてではなく、副葬品として研究されることが多く、鎮墓俑としての研究は進んでいない。本論では鎮墓俑を漢代から三国時代に見られる「人獣型」（人と獣の特徴が混在しているもの）、三国時代から北朝に見られる「人型」、盛唐に見られる「神人型」（仏像の天王像）に区分し、前二者について論じた。「人獣型」は南方地域に限って分布し、前漢早期に淮河流域と長江中流域に出現する。後漢には長江中流域と四川省・雲南省周辺に形態の異なるものが分布し、三国時代には長江中流域のみに残る。一方、「人型」は北方の中原地域を中心に分布し、盾や手をあげるⅠ類「持盾・物」と、盾を置くⅡ類「按盾」に区分される。前者は関中・雲代・洛陽地区に三国時代から北魏にかけて分布し、以後、関中地区のみに分布する。後者は遅れて北朝後半に鄴城・晋陽地区に分布する。この「人型」鎮墓俑は、洛陽を中心として展開し、洛陽に都をおいた西晋および北魏それぞれの時代に独自の型式

を生み出し、王朝の盛衰と関係する。

**第6章**では、以上の編年の結果をまとめ、型式変遷の実態について検討した。第1段階（春秋戦国時代～前漢）は楚の鎮墓神から前漢の人獣未分化「人獣型」鎮墓俑が盛行する段階で、鹿角をつけた像が特徴的で獣への信仰に依存していたと考えられる。第2段階（後漢・三国・西晋・十六国・南朝）は獣型と人型が分化して用いられる段階で、「四足歩行型」鎮墓獣と「人型」鎮墓俑・「人獣型」鎮墓俑がペアで用いられた。第3段階（北朝・隋唐）は、「蹲踞型」鎮墓獣と「人型」鎮墓俑が用いられるが、鎮墓獣は獣人同体の造形になり、「人型」鎮墓俑も神格化され神人同体化する。

以上の変遷において、王朝の交代と関係する鎮墓像の「空白期」を指摘できる。すなわち、秦～前漢前半の空白期は、秦の統一により、鎮墓の習俗が抑圧されたためと考えられる。南方で残存した鎮墓の習俗は前漢で復興する。ただし、北方で新たに登場する「四足歩行型」鎮墓獣は西域を通じて西方から伝来した一角獣を靈獣として採用した。この習俗を取り入れた墓は地方官人のものと推定され、上位の支配階層のものではない。しかし、西晋にいたって、この型式の鎮墓獣を採用する墓は支配階層まで広がる。ところが、十六国・東晋時代にいたると、鎮墓獣の副葬は中断し、第2の「空白期」になる。その後、北方では新たに「蹲踞型」・「伏臥型」鎮墓獣が登場する。

以上、中国古代の鎮墓像について、起源にさかのぼって考察し、全体を把握するために型式区分と編年を行うとともに、型式変遷の意義を考察した。

## IV 成果のまとめ

本論文は、春秋戦国時代から南北朝時代におよぶ非常に長期間に及ぶ時代を通じて、鎮墓像という埋葬習俗に用いられた中国全土の考古資料を体系的に分類し、編年したうえで、その変遷の実態について論じたものである。これまでの研究は、美術史、考古学、歴史学といった立場から研究がおこなわれてきたが、いずれも一部の時代・地域に限定したものであり、全体を体系的に把握する研究は初めてである。本論文の第一の意義はその点にある。本論文には、462点の鎮墓像集成表が図とともに添付されているが、この集成も評価が高かった。本論文は、従来の諸研究が対象とした時代や地域を大きく越えており、今後の鎮墓像研究にとって必ず参照すべき基礎的研究となるはずである。

本論文では、鎮墓像の呼称・型式分類を体系的に行っている。この型式分類は考古学の正統な方法であり、各鎮墓像の部位や姿勢などに関する分類基準としての属性を詳細に検討し、精緻な型式分類を行っている。各型式の編年は、鎮墓像が出土した墓の紀年銘および年代が明らかな副葬品に依拠しており、年代の不明なものは、自らの型式分類にもとづいた型式学的検討を行っている。その結果、おおむね各型式は30年間程度の時間幅の中に位置づけられ、編年の精度は非常に高いと考えられる。このように、客観的な年代を与えつつ、詳細な型式変遷を示すことができたことも、本論文の評価すべき点である。その編年の成果は、文章で詳述するだけでなく、それぞれの型式がいつ、どこに分布するか、明瞭に把握できる型式変遷図で詳細に示している。それぞれの型式の系統的關係が矢印な

どで明示され、非常にわかりやすい。この変遷図によって、断片的な研究では見えてこなかった大局的な変遷、長期的な埋葬習俗の変化が明らかにされており、鎮墓像にとどまらず、中国古代の墓制や文化を把握する上でも極めて意義深い視点を提供できる。型式変遷の具体的な成果については論旨に述べているが、特に、鎮墓神・鎮墓獣・鎮墓俑それぞれの系統的關係を各型式の起源にさかのぼって追求し、楚の鎮墓神と前漢の長江中流域「人獣型」鎮墓獣との關係を明らかにした点は重要である。また、北方ではこれとは別に前漢で「四足歩行型」鎮墓獣が出現し、南方へも影響を与えるという編年研究上の成果や、南北朝時代の鎮墓像各型式の変遷に見られる地域性に関する詳細な理解は、本論のような長期的かつ広域的な研究によって明らかになった重要な成果である。

また、このような長期的変遷の画期は王朝の交代に対応しているという指摘や、鎮墓習俗が認められない時期（「空白期」）の指摘も、その解釈について異論をはさむ余地はあるものの、本研究ではじめて明らかにされた事実であり、今後の研究課題としても重要な指摘である。

## 主な引用文献・参考文献

### \*論文・単行本

（日本語 五十音順）

- 市元壘2001「北朝鎮墓俑の甲冑」『古代武器研究』Vol. 2 古代武器研究会
- 市元壘2007「北魏俑の発生と画期をめぐって」『古代文化』第59巻第1号 古代學協會
- 市元壘2011「出土陶俑からみた五胡十六と北魏政權」『古代文化』第63巻第2号 古代學協會
- 梅原末治1938「伝長沙出土の木彫怪獣像」『宝雲』第21冊
- 梅原末治1994「戦國時代の明器陶俑」『東洋史研究』第9巻第2号 東洋史研究会
- 大井晴男1970「型式学的方法への試論」『考古学雑誌』第55巻第3号
- 岡内三真1980「百濟・武寧王陵と南朝墓の研究」『百濟研究』11号 忠南大學校百濟研究所
- 岡村秀典2002「中國古代における墓の動物供犠」『東方學報』第74冊 京都大学人文科学研究所
- 岡村秀典2003「先秦時代の供犠」『東方學報』第75冊 京都大学人文科学研究所
- 岡村秀典2003「後漢代大型墓の構造と規格」『立命館大学考古学論集』Ⅲ 立命館大学考古学論集刊行会
- 奥村伊久良1939「舌を出ず鬻鬻」『瓜茄』鶯字第一
- 黄曉芬1991「秦の墓制とその起源」『史林』第74巻第6号 史学研究会
- 黄曉芬1995「楚墓から漢墓へ—埋葬施設における開通志向の実現—」『史林』第78巻第5号 史学研究会
- 黄曉芬2000『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠出版
- 小林仁2000「隋俑考」『美術史論叢 造形と文化』雄山閣
- 小林仁 2002「洛陽北魏陶俑の成立とその展開」『美學美術史論集』14輯 成城大學大學

院文學研究科

- 小林仁 2006「中国南北朝時代における南北境界地域の陶俑について - 「漢水流域様式」試論」『中国考古学』6号 日本中国考古学会
- 小林仁2008 「中国北斎時代の俑に見る二大様式の成立とその意義 - 鄴と晋陽」『佛教藝術』297号 佛教藝術學會
- 張 成 2013a「中国古代鎮墓獸の基礎的研究(一) - I類「四足歩行型」鎮墓獸を中心に -」『立命館大学考古学論集』VI(『和田晴吾先生退職記念論集』) 和田先生退職記念論集刊行会
- 張 成 2013b「中国古代鎮墓獸の基礎的研究(二) - II類「蹲踞型」・III類「伏臥型」鎮墓獸の編年を中心に -」『立命館文学』第632号 立命館大学人文学会
- 長谷川道隆1989「北朝時代の武士陶俑」『古代文化』第41巻第4号 古代學協會
- 林巳奈夫1970「殷中期に由來する鬼神」『東方學報』第41冊 京都大学人文科学研究所
- 林巳奈夫1971「長沙出土楚帛書の十二神の由來」『東方學報』第42冊 京都大学人文科学研究所
- 林巳奈夫1974「漢代の鬼神の世界」『東方學報』第46冊 京都大学人文科学研究所
- 水野清一・小林行雄編1970『図解考古学辞典』東京創元社
- 室山留美子2003「北朝隋唐墓の人頭・獸頭獸身像の考察 - 歴史的・地域的分析 -」『大阪市立大学東洋試論業』第13号 大阪市立大学東洋史研究室
- 八木春生2000「南北朝時代における陶俑」『世界美術大全集』小学館
- 吉村苜子1993「楚墓鎮墓像の成立と展開」『Museum』第512号 東京国立博物館
- 吉村苜子2003「中国墓葬における独角系鎮墓獸の系譜」『Museum』第583号 東京国立博物館
- 吉村苜子2012「中国墓葬における人面・獸面鎮墓獸と鎮墓武士俑の成立」『Museum』第638号 東京国立博物館
- 量博満1971「楚文化の性格 - とくに吐舌意匠を中心にして -」『上智史学』16号 上智大学史学会

(中国語 ピンイン順)

- 曹者祉編1996『中国古代俑』上海文化出版社
- 長安博物館2002『長安瑰宝(第一輯)』世界図書出版西安公司
- 楚文化研究会1984『楚文化考古大事記』文物出版社
- 陳根遠2001『中国古俑』湖北美術出版社
- 陳公柔・安志敏1963「長沙戦国繪書及其有關問題」『文物』1963-9期 文物出版社
- 陳万里1957『陶俑』中國古典藝術出版社
- 丁蘭2006『湖北地区楚墓分区研究』民族出版社
- 丁蘭2010「楚式“鎮墓獸”特徵總論」『江漢考古』2010-1期 湖北省文物考古研究所
- 丁蘭2011「楚式“鎮墓獸”与現代牌位關係考」『群文天地』2011(5) 青海省文化館
- 傅娟2006「川渝東漢墓出土吐舌陶塑造像初探」『四川文物』2006-4期 四川省文物局
- 傅喻1993「鎮墓獸的歷史流變」『文史雜誌』1993-1期 四川省文史研究館
- 高崇文2008「楚“鎮墓獸”為“祖重”解」『文物』2008-9期 文物出版社
- 耿華玲2007「楚“鎮墓獸”的源起与楚国族類」『衡陽師範学院学報』2007-4期 衡陽師範学院
- 郭燦江1998「明器略述」『尋根』1998-3期 大象出版社
- 郭德維1982「江陵楚墓論述」『考古学報』1982-2期 中国社会科学院考古研究所

- 郭德維1983「楚墓分類問題探討」『考古』1983-3期 中国社会科学院考古研究所  
郭德維1995『楚系墓葬研究』湖北教育出版社  
郭清華1991「虎形独角獸」『文博』1991-2期 陝西省文物局  
賀云翔·徐吉軍1991『中国喪葬礼俗』浙江人民出版社  
胡美芳2010「鎮墓獸的命名」『芸海』2010-12期 湖南省芸術研究所  
黃文弼1989『黃文弼歷史考古論集』文物出版社  
黃曉芬2003『漢墓的考古学研究』岳麓書社  
黃瑩2009「楚式鎮墓獸鹿角研究」『江漢論壇』2009-12期 湖北省社会科学院  
黃展岳2004『古代人牲人殉通論』文物出版社  
蔣衛東1991「“鎮墓獸”意義辨」『江漢考古』1991-2期 湖北省文物考古研究所  
李零2004『入山与出塞』文物出版社  
倪潤安2008「北周墓葬的地下空間与施設」『故宮博物院院刊』2008-1期 故宮博物院  
倪潤安2010「北魏洛陽時代墓葬文化分析」『故宮博物院院刊』2010-4期 故宮博物院  
牛海鵬2012「淺談嘉峪關魏晉墓出土的銅獬豸」『糸綢之路』2012-16期 西北師範大学  
彭浩1988「“鎮墓獸”新解」『江漢考古』1988-2期 湖北省文物考古研究所  
蒲慕州1993『墓葬与生死：中国古代宗教之省思』台北聯經出版事業公司  
邱東聯1994「“鎮墓獸”辨考」『江漢考古』1994-2期 湖北省文物考古研究所

#### [修士論文]

- 陳千智2007『東周楚墓“鎮墓獸”之研究』（国立台南芸術大学に提出）  
陳怡安2011『北朝鎮墓獸研究』（国立台湾師範大学に提出）  
耿華玲2005『楚“鎮墓獸”形制、文化內涵及其流變綜考』（華中師範大学に提出）  
李峰2008『西安地区隋唐墓葬鎮墓俑研究』（山東大学に提出）  
林信志2005『北朝隋唐「鎮墓獸」之研究』（逢甲大学に提出）  
肖嵐2008『楚国漆器“鎮墓獸”的形制演變与弃意』（華中師範大学に提出）  
魏青利2007『東魏北齊時期陶俑研究』（鄭州大学に提出）  
張成2010『魏晉鎮墓獸俑分期研究』（中央民族大学に提出）  
楊怡2005『西漢大墓明器俑研究』（復旦大学に提出）  
岳改榮2009『北朝鎮墓獸研究』（河北師範大学に提出）  
趙英梅2003『北朝陶俑的分期、分区与用俑制度研究』（山東大学に提出）

#### [博士論文]

- 劉斌2012『魏晉南北朝武士俑的考古学研究』（山西大学に提出）  
王樂文2010『江北地区楚墓研究』（吉林大学に提出）  
鄭岩2001『魏晉南北朝壁画墓研究』（中国社会科学院研究生院に提出）

#### [報告書] 略